
瓦落の皇帝、黎旦の妃。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瓦落の皇帝、黎旦の妃。

【Nコード】

N2429V

【作者名】

津森太壱。

【あらすじ】

狂っていく皇帝と共に在ることを、妃は選んだ。それは誰にも語られることなく、伝えられることなく、在るがままに消えていった物語。

00 : ほんとうは。（前書き）

ようこそおいでくださいました。

中編予定ですが、それでも楽しんでいただければ幸いです。

00 : ほんとうは。

狂っていく皇太子と、それでも妃は、共に在ることを選んだ。
だってわたしの夫だから。
だってわたしの唯一だから。
だってわたしの、愛した人だから。

「そなたは変わっている」

「そうかしら……そうかもしれないわね。だってあなたを愛しているのだもの」

「本当に、変わった女だ」

いずれ狂うと、その自覚のある皇太子が、己れを愛しているという妃に、呆れたように笑う。笑われた妃も、笑い返した。だって仕方ないでしょう、と。

「嫁いでしまったのだもの」

「離縁するか？」

「無理よ。わたしはあなたを愛しているもの。あなたを愛すると決めた日から、わたしはあなただけの妃になったの」

「ばかな女だ」

「あなたに言われたくないわ。それに……知っているもの」

妃は、ふと目線を下げ、腕に抱いた幼いわが子を見つめる。産まれたばかりのわが子は、明日にも、乳母に預けられることになる。

一緒に寝起きできるは、今夜が最後だ。

「あなたが本当は、とても家族を愛していると、わたしは知っているの」

こうして親子一緒にいられるのも、今夜が最後。

「だからわたしはあなたを選ぶわ、ヴェナート」

もう一度、月明かりを背にした皇太子に、視線を戻す。夫たる皇太子は、気難しい顔をしたまま妃を見つめ返してきた。

「……余は狂うぞ」

「わたしもいずれ狂うのでしょうね」

「そなたは……ふん、余に怯えるただの小娘よ」

「怯えてなんていないわ。愛しているもの」

「余は愛など信じぬ」

「そうね。けれど、本当は家族をとて愛している」

妃は「ふふ」と微笑み、腕の中ですやすやと眠るわが子を揺らす。皇太子の視線が、そのわが子へと注がれた。

「忌々しい……」

呟かれた言葉に、妃は笑みを深める。

「天邪鬼ね」

忌々しいと、そう思っるのはわが子の存在ではないくせに。

「なにか言ったか？」

「わたしは幸せだと、そう言ったのよ」

「余に嫁がされて、そなたは不憫なことよ」

「それでも、わたしは幸せなのよ」

誰かの唯一になるということが、どれほどの喜びとなるか、それは皇太子も知ることだ。

「ふん……小賢しい娘だ」

そう言いながら、皇太子は妃の頤に手を伸ばし、唇を奪う。乱暴なくせに、その手も唇も優しく、妃は身体から力を抜くと皇太子を受け入れた。

「サライと一緒に眠れるのは今夜が最後よ」

「……ああ」

「もうひとりの子とも、きっと今夜が最後……朝までいてくださる？」

「この腕には抱けぬ」

皇太子はそれだけ言うと、上着を脱いで、寝台の上にいた妃の隣に滑り込んでくる。身体を横にすると、わが子を真ん中にして、丸ごと抱きしめられた。

「もうひとりには名づけるな」

「……なぜ？」

「余がこれから強いことのために」

「そう……それは寂しいわね」

妃は、そつと腹部に手を添える。ふたりめのわが子には、とても

可哀想なことをしてしまう。けれども、それが妃の選んだ道だった。

「今なら引き返せる」

皇太子は言った。

「余と離縁すれば、な」

皮肉げな笑みを浮かべている夫に、妃は苦笑した。

「もう無理よ」

愛しているのだから、と繰り返せば、そのときだけ、皇太子は夫らしく悲しげな笑みを見せた。

「後悔するぞ。今、このときでなければ、余はもうそなたを手放せぬ。余には、そなたしか残らぬのだからな」

「それでいいのよ。わたしにだって、あなたしか残らないのだから」
選んだことを後悔することはない。

「あなたこそ、後悔するかもしれないわね。わたしという女を、妃にしてしまった」

言い返すと、皇太子は唇を歪めた。

「後悔させてみる、シオン」

それは挑みだ。妃は、肩を震わせて笑った。

「あなたを愛しているわ、ヴェナート」

手のひらを伸ばして頬を撫でれば、僅かばかり、皇太子は身を寄せてきた。

「……そうか」

一言呟き、頬に添えた手のひらに、目を閉じて口づけする。まるで祈るような、願うようなその姿に、妃は身を寄せた。

00 : ほんとうは。(後書き)

*シリーズにあります【仮初の皇帝、偽りの騎士。】の主人公サリヴァンの、両親の物語になっています。
楽しんでいただければ幸いです。

01 : ゆるされない。

その日はなにか波乱が起こるような、そんな前触れなんてなかった。いつもの寧日、そう思っていた。

「シオン義姉さん」

と、呼ばれて、シオン妃は眺めていた庭園から視線を背後へと向ける。

「イディアド殿下……」

「イデアでいいですよ、義姉さん」

夫の弟、第二皇子のイディアドだ。イデア、と皆から愛称で呼ばれ、誰よりも愛されて育った心優しき青年である。

「隣、いいですか？」

「……ええ」

この時間は執務中であるはずだが、と思いながらも、シオンは座っていた石椅子の隣を空ける。腰を落ち着かせたイデアは、それまでシオンがそうしていたように、淡い笑みを浮かべながら庭園を見やった。

「兄さんとは、どうですか」

「……どう、とは？」

「上手くいつているか、ということ。兄さんはちょっと冷たいところがあるから……みんな心配しているんですよ」

傍目からはどう見えているのか知らないが、アイデアの言葉を解釈するなら、よい関係が築かれているとは思えないようだ。

「だいじょうぶですよ」

「本当に？」

「ええ」

「……僕らの心配は無用って、そういうことかな」

「心配されるようなことはありませんもの」

どんな心配をされていようと、それはシオンには無意味なことだ。だが、それをいくら口にしても、おそらくは誰も信じない。こうしてアイデアがわざわざ訊いてくるくらいには、夫たる皇太子ヴェナートの態度は常に酷薄だ。

「義姉さんは、兄さんが好きですか？」

「お慕いしております」

「それは本当に信じてもいい言葉ですか？」

「なにをお疑いのですの？ わたしは望まれて、望んで、嫁いだというのに」

くすくすと笑えば、疑いの眼差しをシオンに向けていたアイデアが、しばし沈黙して見つめてくる。

「義姉さん」

「はい」

「僕は、兄さんに嫌われています」

知っている。けれども、不器用な夫は、それでも愛している。忌み嫌いながら、それでも家族を、愛しているのだ。

「わかつているんです。僕が、みんなの愛を兄さんから奪ったから……僕が皇帝国主の天恵を持つているから……だから兄さんは、僕が嫌いなんです。でも僕は、兄さんが好きです」

それも知っている。この兄弟の因縁は、どうしたって修正できるものではないことも、シオンは知っている。

皇帝国主の天恵。

それはこの聖国、ヴァリアス帝国の皇帝となるために必要となる、神の恩寵。

世界の調和と均衡を司り、柱となる、大きな力。

アイデアに与えられ、ヴェナートには与えられなかったもの。

今はヴェナートが担っているものの、いずれはアイデアがその座に就き、皇帝となるだろう証。

「こんなもの……僕は要らなかった」

アイデアは右手で左腕を強く握り、そこにある天恵の刻印に顔をしかめた。

その刻印があるから、アイデアは誰よりも愛されて、皆に祝福されて育った。だがそれは、アイデアにとって重圧であっただろう。刻印のないヴェナートが、アイデアとは逆に、蔑まされて育ったのだ。それを目の当たりにして、平然としていられるアイデアではない。

だからヴェナートは、心を閉ざした。兄を庇おうとする弟に、背

を向けた。それがヴェナートの愛し方だった。

ヴェナートの愛し方は、アイデアには理解できないだろう。シオンにだって、理解できない。それでも、そんなヴェナートだから、シオンは惹かれた。

「あなたを苦しめたいわけではないのよ、あの人は」

苦しめたくないから、心を閉ざし、背を向ける。それは無関心であって欲しいと、そういう願いだ。

「けれどあなたは、苦しいのね」

アイデアはヴェナートの願いを受け入れたくないらしい。自ら苦しむ選択をし、それでもなお、ヴェナートの背を追い続けたいのだから。

わからなくはない。

「あの人を愛しているのね」

シオンが愛しているように、アイデアもまた、兄として愛している。歯痒いことだ、と思った。

想い合っているのに、その想いを伝えられず、伝えることを許されない。

「知らなかったんですか、義姉さん。僕は、兄さんを愛していますよ」

ふっと微笑んで言ったアイデアに、シオンも微笑んだ。

「知っているわ」

伝え合い、素直に想い合うことができたなら、なにもかも変わっていただろう。

たとえばそう、ヴェナートが狂う未来なんて、こない。アイデアがこれから迎える未来なんて、こない。

「義姉さんにだけでも言えて、よかった」

立ち上がったアイデアが、両腕を天へと伸ばし、グッと背を反らせて息を深く吸い込む。吐き出しながら腕を下ろすと、シオンを振り返った。

「お別れです、義姉さん」

シオンは目を細めて、寂しそうに微笑む義弟を見つめる。

「わたしはあなたを止められない。あの人のことも」

「仕方のないことです。これが僕の……いえ、僕らの運命なのでしょう。けれど僕は、兄さんを諦めるつもりはないですよ」

「あの人を連れていくの？」

「僕だけ、なんて……寂しいじゃないですか」

だから許してくださいね、とアイデアは言った。シオンは微笑んで、首を左右に振った。

「いいのよ。わたしはあの人についていくだけ。仕方のない人たちだわ」

「……巻き込んですみません、義姉さん」

「謝る必要なんてないわ。だってわたしは……あの人の妻ですもの」

だからいいの、と繰り返すと、イデアは困ったように笑った。

「敵わないなあ、シオン義姉さんには」

そう言つて、イデアはシオンに背を向ける。

「では、僕はお先に。あちらで待っていますね」

ばいばい、と後ろ背にシオンへ手を振りながら、誰からも愛される飄々とした義弟は立ち去った。

その背中が深い緑の自然に紛れると、シオンも座っていた椅子を離れる。頬を撫でる風も、身体を包む陽光も、いつになく優しくかった。穏やかな日だった。

それが嵐の前の静けさ、というものだったのかもしれない。

その日の夜。

皇帝の証たる天恵を与えられていた第二皇子イデアードは、死んだ。

亡骸の傍らにいたということから、皇太子ヴェナートにその嫌疑がかけられたのは言うまでもない。しかしイデアードの死の真相はヴェナートから語られることなく、明かされることはなかった。ただひとり、シオンを除いては。

「ヴェナ……」

「……アイデアが死んだ」

「聞いたわ」

「そなたも巻き込まれたな」

「それでいいのよ」

「……そうか」

シオンのもとに戻ってきたヴェナートは血塗れだった。けれども、確かに、その手のひらは赤く染まっていなかった。

「……シオン」

「はい」

「余は、狂わねばならぬらしい」

「……では、わたしも狂いましょう」

血に汚れていないヴェナートの手のひらを、シオンは両手で包み込んだ。

「だから、泣いていいのよ、ヴェナ」

「……」

「悲しいわね、ヴェナ」

「……」

「寂しくなるわね、ヴェナ」

「……シオン」

手のひらを握り返されると、強い力で引き寄せられた。鼻を突く血の匂いよりも、その腕の力に、シオンは酔う。

「シオン……シオン」

誰にも、シオン以外に見せることのない姿に、シオンはアイデアの死の真相を知る。

「ヴェナ……っ」

悲しいと、寂しいと、泣くことを許されない夫のために、涙した。

02 : この世界より大切なもの。

シオンがヴェナートに出逢ったのは、幼い頃だ。侯爵家の娘であったシオンの家に、街へ下りてきていたヴェナートが迷い込んだのが最初である。その頃からすでにヴェナートは冷めた瞳でものを見ていて、口数も少なければ表情が変化することもなかった。その原因は、すぐに知れることになる。庭に迷い込んだヴェナートを見つけたシオンの父が、シオンの目にもわかるほど険しい声で、ヴェナートを叱責したからだ。ヴェナートが自国の皇子であることを知ったのもこのときだ。

『おうじさま……？』

『……そうらしいな』

『らしいって……』

『おれは要らぬ異分子だ』

幼いながらも、だからこそ、ヴェナートはおとなをよく見ていた。望まれていない存在なのだと、理解していた。なぜと理由を訊ねれば、自分には刻印がないからと、淡々としていた。

『こくいんって、なに？』

『皇帝国主の天恵……おれは只人だ』

天恵とは、神の恩寵だ。それは属性を持ち、精霊と契約することで能力を増幅させ、国では天恵術師と呼ばれる。

シオンには天恵がない。だから、ヴェナートのその言葉はいまいち理解できなかったが、それは年齢を重ねることに解釈できるようになった。

皇帝国主の天恵は、つまり国土という大きな存在との契約であり、神からの祝福であった。

シオンがそれを理解できるようになった頃、再びヴェナートに逢う機会ができた。

『わたしが……ヴェナートさまの、妃？』
『いやなら断れ』

政略的であり、またヴェナートに対する牽制を意味する縁談が、再会の機会を与えた。

『……側妃でしょうか』
『は？』
『ヴェナートさまは皇子でいらっしますし……』
『気にするところはそこなのか？』

シオンとしては、貴族の娘に産まれた限りは、政略的な婚姻など当たり前だと教えられているので問題はない。ただ、できればその相手がヴェナートであればと、そう思ったことは一度や二度ではない。

つまるところ、シオンは出逢った当初からヴェナートの素性に関係なく好意を抱いていたわけで、いろいろと知ってからその気持ちが変わることがなかったのである。

『わたし、ヴェナートさまをお慕いしておりますし』
『……正気か？』

『能天気だとはよく言われますが、正気かと言われたのは初めてです』

『……頭だいじょうぶか』

暢気だとか、能天気だとか、もう少し頭を使えとか、それは家族によく言われることだった。シオンとしてはよく考えて慎重に考えて行動しているのだが、傍から見るとそれは危機感を煽られるものであったらしい。

だが、ヴェナートのことは別だ。

『一目惚れの初恋ですもの』

そうさざりと言えてしまえるくらいには、ヴェナートが好きだった。

このときのヴェナートの顔は、よく憶えている。

『変な女……』

顔を引き攣らせていたヴェナートは、それからすぐ、腹を抱えて笑っていた。なぜ笑われているのかシオンにはわからなかったが、そんなヴェナートを見たのは初めてだったので、そちらのほうが嬉しくて一緒に笑った。

『そなたでよいか……いや、そなたがよいな』

『はい？』

『シオン』

『？ はい』

『余に娶られる』

笑っているヴェナートには、とても心惹かれた。おれ、という一

人称から、余、と言うようになったその姿は、とてもかつこよかった。

『余の妃になれ、シオン』

差し伸べられた手のひらに、シオンは幸せを噛みしめながら、手を伸ばした。

シオン・ウエル・アルファロイが、ヴェナート・セイズ・ヴァリアスの正妃に迎えられたのはその年中頃のことになる。

「シオン、起きろ。腹が減った」

夢を見ていたのか、と思いながらシオンは目を覚ました。傍らには、いつもはないヴェナートの起きがけの姿がある。それは珍しく、しかし、しばらくの謹慎を言い渡されているために、その場所をシオンの居室に勝手に決めたがゆえのことだ。ヴェナートに「起きろ」と言われて目覚める日々が、このところの日常である。

「どうしていつもわたしより早いのかしら」

「……皇太子とやらは忙しいのでな」

「それはお疲れさまでございます」

「ああ」

素っ気なく返事をしたヴェナートは、椅子の背にかけていた上着

を羽織ると寝室を出ていく。少しして侍女のユマが寝室へ入ってきた。

「おはようございます、妃殿下」

「おはよう、ユマ。今日もお願いね」

薄茶色の髪を揺らしながら、にこりと微笑んだユマに支度を整えてもらう。隣接している衣裳部屋から礼装ドレスを選んでもらっていたとき、早くも着替えを済ませたヴェナートが顔だけ覗かせた。

「シオン」

「きゃっ」

「？ なにを驚く」

「まだ着替えの最中です！」

「……今日は藍色にしろ」

なにかと思えば、礼装の色の要求だった。言つてすぐ、ヴェナートは顔を引つ込めて扉を閉める。ヴェナートがそういった要求をするのは、たまにあることだ。

「……ユマ」

「聞こえておりました。藍色でございますね」

衣裳部屋から、ユマが藍色の礼装を持ってくる。艶やかなそれは、久しく袖を通していないものだ。

ユマに手伝ってもらつて支度を整えると、シオンは漸く寝室から出る。シオンの定位置となっている椅子に座ったヴェナートが、先に朝食を摂っていた。

「どうして待つてくだらないのかしら」

「忙しいからな」

「それはお疲れさまでございます」

「ああ」

先ほども同じような会話をした気がする、と思いながら、シオンも朝食をいただくべく椅子に腰かけた。食事はすぐに運ばれてくる。今日の麺麴は柔らかそうだ。

「失礼いたします、ヴェナート殿下、シオン妃殿下」

ヴェナートが食事を終え、シオンも食べ終わろうという頃、居室の扉が叩かれてヴェナートの側近、ガラン・オル・アークノイルが入室してきた。時間が時間なので、なにごとかとシオンは食事の手を休める。

「お食事中、申し訳ございません。至急お伝えしなければならなかったが…… よろしいでしょうか」

ガランの唐突な来訪を気にした様子もなく、ヴェナートは無言でちらりと視線を投げた。ガランはそれを了承と受け止め、深呼吸のち真っ直ぐとこちらを見つめてくる。

ガランのその双眸に、シオンはなにか危機迫るものを感じた。

「皇帝陛下が崩御なさいました」

それを聞いた瞬間、シオンは瞠目する。すぐにヴェナートを見たが、彼は落ち着き払ったかのように食後のお茶を飲み、そうして窓の向こうを見やった。

「そうか……」

一言、それだけで、ヴェナートは父である皇帝の死を受け入れた。

「本日このときより、ヴェナートさまが皇帝でございます」

ガランの言葉に、ヴェナートは振り向く。その顔に表情はない。淡々と、現実を受け入れていた。

「ヴェナ……」

シオンはそつと、ヴェナートの腕に手を添える。ヴェナートは身動きもしなかったが、シオンは、その手のひらがきつく握られているのを見た。やはり動揺していないわけではないのだと、知る。

「ガラン」

「はっ」

「議会の招集だ」

「御意、ヴェナート皇帝陛下」

ガランが踵を返して足早に出ていく。

ヴェナートは、しばらく動かなかった。

「……シオン」

呼ばれたとき、ヴェナートはシオンの手を、ぎゅっと握りしめていた。

「シオン」

声は震えていない。けれども、痛いくらい強く、手を握られた。

「世界が、狂う……な」

「……そうね」

「余も、狂わねばならぬ」

「わたしも一緒よ」

「……そなたただけだ、シオン」

「ええ、わかっているわ」

椅子を立つたヴェナートは、その手もシオンから離れた。くるりとシオンに向けた背は、もはや言うまでもなく、上に立つ者となる。

「ではな、シオン」

「気をつけて」

ヴェナートは振り返ることなく、己れの身にこれから起こることと戦うために、部屋を出て行った。

これからどうなるだろう。

否、結末はすでに決まっている。

ヴェナートは自ら狂い、シオンはそれと共に生きていく。
その未来しかない。

「ひどいことをするのね……」

呟きは、誰に聞こえることなく、空気に消える。しかし、恨みごとを聞き届けたかのように、シオンの耳には幻聴が届く。

僕だけなんて寂しいからね、と。

僕にはこの世界より大切なものがあるからね、と。

だから一緒にいようよ、と。

いったい誰がこの顛末を知っているだろう。これが仕組まれた未来であり、そうなるように初めから動いていたなど、誰が知り得ただろう。

「ひどいわよ……アイデア」

シオンは、未だヴェナートのぬくもりが残る手のひらをぎゅっと握り、額に押しつける。

ヴェナートを狂わせる未来が、憎いと思った。

ヴェナートが狂うしかない未来を、忌々しいと思った。

いったい、どうして、世界はこんなふうになってしまったのだろう。

02 : この世界より大切なもの。(後書き)

*この物語の題名は、『がらのこつてい、れいたんのひ。』と読んでいただければ幸いです。

03 : この世界の残酷なこと。

モルティエ・ウエル・メルエイラはその日、爵位の降格を言い渡された。若き皇帝からの一方的な宣言で、侯爵から伯爵へと貴族位を落としたのである。モルティエはそれを享受した。それだけで済まされたのは奇跡にも近しかった。

ただ、モルティエには思うことがあった。

「なぜ、そこまでなさるのですか」

モルティエは頂垂れつつも、全身で、両腕にしっかりと抱きしめた赤子を護る。モルティエに一方的な宣言をした若き皇帝、ヴェナートは、そんなモルティエに一瞥をくれることもない。そっぽを向いたまま、こちらに意識を向けようともしない。

「産まれたばかりの殿下には、なんの罪も、ございませんでしょうに」

モルティエが腕に抱く赤子は、先日、皇妃シオンが産み落とした第二皇子だ。シオンの面影をそのまま写したかのような、愛らしい皇子である。

「赤子に罪はないと、陛下も御承知でありましょうや」

泣きもしなければ笑いもせず、ただあるがままにおとなしく呼吸する赤子には、誰だって手を差し伸べたくなるだろう。その誕生を、誰だって喜ばしいと思うだろう。

だが、そんな雰囲気にも包まれることなく、第二皇子の誕生には緊張が走った。

「二つと要らぬ」

漸くモルティエに意識を向けたヴェナートは、しかしそっぽを向いたままモルティエを見ることはない。

「要らぬとて、陛下のご子息でありましょうや」

「要らぬものは要らぬ」

ヴェナートとの会話は平行線を辿る。

己れの息子で、ヴァリアス帝国の第二皇子でもあるというのに、いったいどうしてそれを要らぬと言えるのか、モルティエにはわからない。

モルティエには現在、息子と娘がひとりずついる。可愛くて仕方のないわが子たちだ。自分によく似た息子と、妻によく似た娘、産まれたときはとても喜んだものだ。

それなのに、同じ父親という立場にあるはずのヴェナートには、それがない。

理由は明白だ。

「殿下に、皇帝国主の天恵があるとて、それは殿下が真に陛下のお世継ぎであることでありましょうや」

「サライだけで充分だ」

「だとしても」

「うるさい。余は、要らぬと言っているのだ」

「陛下！」

「いい加減にしろ、モルティエ。爵位を剥奪されたいのか」

産まれたばかりの第二皇子を庇い建したという罪で、降格を宣言されたばかりの身だが、剥奪というのはもはや、モルティエには効力がない。もともとモルティエの一族は生粋の貴族ではなく、先代の時分に腕を買われて爵位を与えられているのだ。降格も剥奪も、さして変わらない。恐れるところではない。

「貴族位など返還いたしましょう。それで陛下が考えを改めてくださるのなら、これほど嬉しく思うことはありません」

子殺しをしようというヴェナートの、その意思を挫けるのならば、そう思つての言葉は、しかしヴェナートには通じなかった。

「つまらんな」

ただ一言そう呟き、あつさりと前言を撤回してしまう。考えを改めるほどの価値もないと、そう言っているようなものだ。

「なぜ…っ…なぜですか、陛下」

悔しい。ヴェナートにわかってもらえないことが、生命の誕生を喜んでももらえないことが、悔しくて悲しい。

ヴェナートの御世になって一年、万全ではなくとも順調に国は動いた。ヴェナートに皇帝国主の天恵がなく、その刻印を身に宿していなくとも、ヴェナートは確かに皇帝国主で、間違いなく賢帝だ。だのに、なぜ。なぜ。

産まれたばかりの第二皇子に皇帝国主の天恵が、その刻印が受け

継がれたことを、どうしてここまで拒絶するのだろう。

「この御子は、あなたさまの……っ……シオン妃陛下の、御子でしょうや」

なんであれ、己れの子であるのに、どうして拒絶するのだろう。

「サライ殿下と同じく、ただひとりの、御子でしょうや……っ」

産まれたばかりの子に罪はない。その業は子のものではない。それはヴェナートも身をもって知っていることだろうに、どうしてそれをわが子にまで背負わせようとするのだろう。

「……モルティエ」

ふと、ヴェナートに呼ばれる。悔しくて俯かせていた顔を上げれば、ヴェナートの視線を正面から受け止めることになった。

「余は、望まぬ。余が望まれなかったようにな」

碧い双眸は、その言葉に、すべての心を注いでいた。

「だから要らぬのだ、それは」

陰った双眸に、モルティエははっと、瞠目する。同時に、じわじわと、深い悲しみが込み上げてきた。

「陛下……っ」

「余には言えぬ」

許せ、と。

口にはできない代わりに、ヴェナートの双眸は語る。

それを言えないヴェナートは、モルティエの目から逃れるように背を向けると、上着の裾を捌いて部屋を出ていった。

「なんという…っ…ことだ」

この世界の無常を嘆きたい。

素直な心を曝すことも、吐き出すことも、思うことさえも押し殺されてきたせいで、もつとも救われなければならない人が、許されないことを強いられる。

なんという残酷さだろう。

この世界は、この国は、残酷なことを彼に強いる。

「殿下……どうか、恨まないでください。嘆かないでください。あのお方は、そう生きるよう、強いられています。ですからどうか……どうか」

願わくは、この残酷な世界が、永久ではないことを。

いつか必ず、報われることを。

幸、多からんことを。

モルティエには、それを祈り、願うことしかできない。

「メルエイラ候……いえ、メルエイラ伯」

あるじが立ち去っても残っていた側近、今や宰相となったガラシが、心配げな声でモルティエを呼ぶ。跪いていたモルティエは、ゆっくり立ち上がると腕の第二皇子を抱え直し、ガラシを見据えた。

「アークノイル宰相……どうか貴殿だけは、あのお方と共に在ってください」

「……メルエイラ伯」

「わたしには、やる必要があります。わたしにしか、できぬでしょう。ですから……っ」

この想いを理解して欲しい。

誰も、不幸など願ってはいないのだ。

「わたしは、ヴェナートさまと共に在るだけです。シオン妃陛下が、そうお決めになられたように」

モルティエの言葉を聞き届けたガランは、そう言って深く頭を下げると、ヴェナートがそうしたように部屋を出て行った。

ひとり残ったモルティエは、腕の第二皇子を緩やかに揺らしながら見つめ、その心を決める。

「あなたを猊下の御許へ、お連れいたします」

それがこの世界の残酷なことを、終わらせると信じて。

03 : この世界の残酷なこと。(後書き)

*このあとモルティエはなにをしたか。

【仮初めの皇帝、偽りの騎士。】の番外編『plus extra
a : 聖王の眷属。』を読んでいただければ、おわかりになるか
と思います。

04 : 語られることなく、伝えられることなく。

執務中であるはずの夫、皇帝となったヴェナートがふらりと姿を見せたとき、シオンは寝室で休んでいた。産後の経過が悪く、どうも体調が思わしくなかったからだ。

「シオン」

ふらりと現われたヴェナートは、どこか心あらずで、しかしシオンを呼びながらきちんとした足取りでシオンのもとへ来ると、寝台に腰かけた。

「お忙しいのではなくて？」

「それなりだ」

「そう。こんな時間に、いったいどうしたの？」

「……シオン」

「はい」

「側妃が送られてくる」

一瞬、シオンは息を詰める。だがすぐに気を取り直した。

「では、後宮が開くのですね」

ヴェナートは皇帝だ。すでに世継ぎたる第一皇子サライがいても、それとは関係なく、政治的なものが絡んだ縁談がくる。今までシオ

ンしかいなかったことのほうがおかしい。それはシオンもわかって
いた。

「いやか」

「よい気はもちろんしません。けれど、必要なことなのでしょう？」
「そうだな……」

面倒だ。ヴェナートはそう小さく呟いて、後ろに倒れる。ちょうどそこにはシオンに膝があって、枕にされた。

「ヴェナ？」

「疲れた……眠らせろ」

ごろりと、無造作に寝転がったヴェナートは、シオンが上着の心配をしても動かず、むしろ心配するなら自分にしろと言い、強引に眠る体勢に入った。

「上着が……ヴェナ、お脱ぎになって。皺になるわ」

「眠らせると言っている」

「それはかまいません。けれど、また仕事に戻られるのでしょうか？
皺だらけの上着なんて」

「うるさい」

もう黙れ、と急に身体を起こしたヴェナートは、シオンの口を手のひらで覆い隠すとそのまま押し倒してくる。一緒になって寝台に寝転がってしまった。

「ヴェナート……わたしが病人だとわかっていて？」

「だから黙れと言っている。いいから眠らせろ。疲れた」

これ以上は喋らせてくれるなど、ヴェナートはシオンの胸元に顔を埋めてしまうと動かなくなる。

疲れているというのは本当だろう。シオンが諦めておとなしくしていると、すぐに寝息が聞こえてくる。

「……今日もまた、叩かれたのね」

シオンはそつと手を伸ばし、ヴェナートの淡い金の髪を梳く。眠っているときだけは歳相応の顔をする夫は、シオンの少しばかり豊かな胸に満足している様子だ。

「妃殿下」

「……ガラン、そつとしておいてくださる？」

来ていることには気づいていたが、ヴェナートが空気で存在を抹消させていたガランは、寝室の手前でずつとヴェナートの様子にやきもきしていた。漸く声をかけられる、と思ったのだろうが、シオンにはヴェナートの眠りを妨げる気がない。素っ気なくすると、ガランは肩を落としてずすごと姿を奥に引っ込めた。

これで、ヴェナートの眠りを妨げられるとしたら、その者はシオンだけになる。

そう、思ったのだけでも。

「一緒に眠るなよ」

ヴェナートの眠りに引き摺られてうとうととしていたら、無理やりそれを起こす声に引っ張られる。

「……あなた」

ヴェナートを気遣わない声にムツとしながら、シオンはゆっくりと身体を起こした。勝手に窓を開け、欄干に腰かけた青年を、睨むように見つめる。

「ウィード」

艶やかに反射する濃い金の髪、嘲笑うような朝焼けの双眸、それは笑うことも忘れた壊れた人形のように、ただそつと静かにこちらを見ている。

その青年はウィード。

本名は知らない。皆が彼をウィードと呼ぶ。だからシオンもウィードと呼んでいる。ただ、いつも壊れた人形のようにだと、思う。

「なにか、用かしら？」

「一緒に眠るな、と言った。その耳は飾りか」

ウィードの声は、眠るヴェナートに気遣いが無い。それはシオンを不愉快にさせたが、それ以上に、ウィードがシオンの前に現われるという珍しい事態に、かなり驚かせられる。

「ヴェナが起きてしまうわ。声を抑えて」

「必要ない。眠れと言ったのはおれだ」

「……あなたが？」

「そんな顔でうるちよろされると、困るからな」

ヴェナートの寝不足を指摘したウィードは、その身分は近衛騎士だが、ヴェナートの目や耳になることもしばしばある。いつからヴェナートがそばに置き始めたのか、それはシオンの知るところではないが、随分と長いようで、シオンやガラン以外に唯一ヴェナ

ートの状態を把握できる騎士だ。

「……よほどひどく、当てられたのね」

いつもはシオンに話しかけもしないウィードが、わざわざ姿を見せてそれを教えてくるほどに、ヴェナートは糾弾されたのかもしれない。

「サリエ・ヴァラディン」

「え……？」

「サリヴァン、と……名づけられたぞ」

僅かばかり呆けたシオンは、ハッと息を呑む。

「あの子が……？」

つい最近まで、この身に宿していた命。産み落としてのち、逢うことも許されぬまま、連れ去られてしまったわが子。第二皇子として、育てられていくはずだった息子。

「サリヴァン、と……いうの、ね」

「殺そうとしただろう」

グツと、シオンは顎を引く。言葉に詰まって、思わずウィードを見つめてしまった。

「貴族はそれを叩いた。サライのほかに、皇帝国主の天恵を持つ皇子だ、当然だな」

シオンは眉をひそめて俯くと、強く拳を握った。

「……言い訳をさせてくれるかしら」

「おれに言っても意味はない」

拳が震える。身体が慄く。

ヴェナートが選んだこと、シオンが口を噤んだこと、それらは罪だ。罪だとわかっていながら、それでもなお前へ進んでいる。そこに後悔はない。

けれども。

「それでも、誰も聞くことがなくても、一度でいいから言わせてちょうだい」

ただの自己満足、身勝手な都合であっても、罪の意識に苛まれて心が挫けそうになることを許して欲しい。

子殺しをしようとした、その事実を覆せないものだけでも。

「なんだ？」

聞いてくれるらしいウィードに、シオンは息を震わせる。

「サライの左腕に、あの子の右腕に、刻印は出た。それはまるで、ヴェナとアイデアと、同じなのよ」

「……なんだと？」

大げさではないかというほどに瞠目したウィードに、シオンは空笑いする。

「ヴェナから聞かされなかったのかしら？」

「聞いてない。おい、その言葉の意味、わかっているのか」

「もちろんよ。なぜなら、アイデアの左腕に刻印があったように、ヴェナの右腕にも、刻印があるもの」

それは誰も知らない事実。シオンだけが知る、真実。

「ヴェナートにはないとされていたはずだ。本人もそう言っている。いったいどういうことだ」

ウィードにも知らないことがあるのだと思うと、なんだか不思議だ。ヴェナートの傍らで、あらゆる情報を握っているはずのウィードも、さすがにヴェナート自身のことは知るに難しいことだったのだろう。

腰かけていた欄干から身体を離し、歩み寄って来たウィードは、壊れた人形にしては珍しく混乱したような顔をしていた。

「説明しろ、シオン。それは、いったいどういうことだ」

「ルーフの花よ」

「？ それは刻印の模様だろう？」

「赤く、咲くの」

国花たるルーフの花は、白く咲く。それは誰でも知っていることだ。そして、白くしか咲かないルーフの花が、まれに、赤く咲くこともあると、誰もが知っている。

本来は白くしか咲かないルーフの花が、赤く色づくとき。

「……そういえば」

「なにか思い当たるかしら？」

「ヴェナートが通る道には、赤いルーフしか咲かない」

「それを、ヴェナが起こしている事象だと、誰もが信じないだけよ」

白いものが、赤く染まるその事象を、人々は「天患者の身を案じての、天地からのお告げ」だと言う。ルーフの花は、天患者を心配して、その身を染めて注意を促すとされているのだ。

「そしてヴェナは、ルーフの花が本来は白いと、知らなかったそうよ」

ヴェナートは幼い頃から、赤いルーフの花しか見たことがなかったという。白く咲くのだという事実を、それが当たり前だということから、誰もヴェナートに教えなかったのだ。

「いつ、それに気づいた」

「ヴェナの右腕に、刻印が現われたときよ」

「それはいつだ。おれは知らないぞ」

「アイデアが死する、直前のことよ」

「……最近だと？」

「だからアイデアは死んだの。ヴェナの愛を、永遠に自分のものにするために」

愕然としたように、ウィードはシオンを見つめてくる。いつでも淡々とし、機械人形のようなウィードのそれは、そんな姿など一度も見たことがなかったシオンを不思議にさせる。

「……おれが駆けつけたとき、イディアードはすでに死んでいた」

「あなたまで、ヴェナがアイデアを殺したと言うの？」

「違う。真実がわからなくなった。ヴェナートの真意も、イディアードの真意も、まるでわからなかった。ふたりは、周りは犬猿の仲

だというが、そんな姿など誰にも一度も見せたことがない。周りが勝手に噂立てていることだ。だからふたりになにかが起こるなど、あり得なかった」

「けれど、実際には、起きたわ。イデアは死んだ。本当に、ひどい人よ」

「どういうことだ。いったいなにがイデアードを……」
「わからないの？」

シオンよりずっと近くで、いつもヴェナートを見ていたくせに、意外にもウィードの目は節穴だ。

「だからヴェナは、あの子を……サリヴァンを殺そうと思ったのよ。自分たちのように狂わせるくらいなら、今ここで消えてしまったほうが、幸せなもの」

「……それが、子殺しをしようとしたことへの、言い訳か」
「ヴェナを狂わせ、イデアを狂わせ、人を振り回す……そんな天恵があるから、ヴェナが、苦しむのよ……っ」

皇帝国主の天恵が、どれほどその影響力をもたらすことか。天恵がない、刻印がない、只人である、そんな当たり前のことが異質とされ、異分子とされ、異形とされるこの王城で、ヴェナートは生きていくしかなかった。どれほどつらかったことだろう。どれほど悲しかったことだろう。只人であることは当然なのに、それを許されない環境の中で生きるしかなかったヴェナートに、いったいなにができただろう。

「ヴェナは、平穏を、望んだのよ……っ」

「……それは知っている」

「多くの重圧を背負いながら、それでもなお、ヴェナは皇族であるうとした……仕方ないわ、皇族だもの、それ以外のなに者にもな

れない。けれどそれが、ヴェナを、苦しめるの……っ」

今はただ静かに眠るヴェナートに、シオンはよりいっそう身を寄せる。シオンが身を起こしていたことで肌寒かったのか、応えるようにヴェナートはシオンを引き寄せた。

「どうするつもりだ、シオン」

「これは罪よ」

「罪？」

「そう、この国の罪。だから言わない。ヴェナも、きっと、永遠に口を噤むでしょう」

「それこそが罪だとしても、か？」

「噤むわ」

けして、誰にも、言わない。教えてなるものか。その苦しみも知らず、つらさも悲しさも知らぬ者たちに、幸せを与えるつもりはシオンにはない。それが罪となっても、これはシオンが選んだことだ。

ヴェナートが皇帝国主の天恵授受者であること、それはシオンと、ウィードだけが知る。

誰にも語られることなく、伝えられることなく、幕は閉じられるだろう。

それでいい。

その道を生きることが、ヴェナートとシオンの、狂ったことへの答えだ。

「ウィード」

「……なんだ」

「あなたとガランだけは、信じて」

「なにを？」

「ヴェナが家族を愛しているということを」

ヴェナートとシオンを狂わせているのは、国という組織。

ここで生きるしかない者たちの、それは必然たる道筋。

「語られることのない真実が、確かに存在したということを」

懇願するようにウィードに言うと、ウィードは数秒ほど口を閉ざし、そののちゆっくりと息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2429v/>

瓦落の皇帝、黎旦の妃。

2011年10月9日21時21分発行